話題４７

「ラサール神父物語」の序文

「ぐす～よ～」の挨拶でおなじみの「ラサール・パーソンズ神父」が、沖縄の地に足を踏み入れたのは、１９５８年（昭和３３年）９月１６日、午前２時のことであった。

鉄の暴風に見舞われ、焼土と化した南の島に降り立った２７歳の青年宣教師が目の当たりにした当時の沖縄とは、どのようなものであったであろうか。

そして、激動の５０数年が矢のごとく過ぎ去った。激戦地沖縄は、その悲惨な爆撃の爪痕を残しつつも、本土復帰が実現した。交通、通信網の発達と高度経済成長の嵐が吹き荒れ、古来琉球の文化も本土並みに均一化の波にさらされていった。

外人宣教師は、目撃した沖縄の風土、文化、政治、経済の変遷をどのようにとらえたのであろうか。

神父は、沖縄の素朴な祖先崇拝を貴重な「宗教心」の表現としてとらえているような気がする。結婚式の司式はもとより、告別式は当然のこととして、七七忌、三年忌、十年忌、地鎮祭等々の多くの沖縄の習慣に自らの信仰の魂を織り込んで引き受けてくださる。ごくごく自然に、信仰の、宗教の沖縄への土着化を図ってきたと表現してもいいのかもしれない。

もしかすると、「図った」という用語は適切ではないかも知れない。資料を整理するにつれて、青年宣教師ラサール神父は、沖縄の風土の中に旧約の,そして新約の信仰の「礎」を見出したのではないかと思われる。「図った」のではなく、ごくごく自然に、琉球の風に溶け込んでいったような気がしてならない。

そして、自らの生きる意味を問い続ける道中においても、一貫して社会との関わりを堅持してきた足跡がある。真理と正義と平和を希求し、「正義と平和委員会」を組織し歩き続けた。「人権擁護運動」にも参画し、沖縄人権協会の理事を務め、精力的に市民運動を牽引してこられた。アムネスティ・インターナショナルの沖縄代表の任にもある。

かつて首里の崎山町に「コレジオ寮」なる学生寮が存在した。琉球大学が首里の地にあった頃のことである。指導司祭として、多くの学生と寝食を共にし、沖縄の多くの若者に刺激を与え、夢を見させた。琉球大学カトリック研究会の機関誌「暁」は、宗教とは、宗教心とは何か、そして平和を追求する過程においての政治・経済とその仕組みに関しての飽くなき追求の姿勢を物語っている。

琉球大学の非常勤講師として、英会話の講師を約１０年間にわたり務められた。沖縄の若者に接することにより、若者の心理を把握するとともに、宗教心を育むことは神父の望むところであった。

神父が代表を務める「沖縄・生と死と老いをみつめる会」の前身は、１９９４年に結成されたラザロ会にあった。ラザロ会は、沖縄での「死への準備教育」や「終末期医療」の問題について考える市民グループであり、講演会、講話、語り合いの会等を主催し、「生と死」について考える機会を提供してきた。

そして多くの方々の要望に応える形で、１９９６年５月２５日に名称を変更して、「沖縄・生と死と老いをみつめる会」が結成された。約２０年の歴史を有し、今なお毎月の定例会が行われている。まさしく、「生と死と老い」の問題は国境を越えた永遠のテーマである。神父は、常にこの会の先導役を果たしてこられた。８５歳の今日、５０数年前の青年宣教師のまなざしは、いまだに衰えることなく輝いている。

神父の足跡をたどることにより、地元の人間には見えない何か、土着の人間は気づかない沖縄の文化を、外人宣教師の視点から照らしてみたい。いや、それは沖縄県人よりも、なおウチナーンチュ（沖縄県人）である神父の視点でもある。

殺伐とした世相である。「目には目を、歯には歯を」の世界がある。戦後の貧困の時代から本土復帰は叶ったものの、いまだに占領下の状況にある沖縄。めざましい経済発展はみられたものの、果たして精神的にも豊かな社会の実現に向けての歩みであったのであろうか。
神父の足跡を、そして思いを辿ってみたい。

なお、本来なら「ラサール神父の自分史」にする予定で臨んだが、データの整理等から、ご高齢の神父様にはかなりの負担を強いることになるため、私が代行し一部執筆・編集することになった。可能な限り、ご本人のデータを忠実に描写するよう試みたが、おなじみの「ラサール節」が、私の口調と入り乱れた文章になってしまったことをお詫びいたします。

なお、神父の自分史作成については、約１０年前にも試みられていた。写真集の形での編集であったため、極力、論文や講演の内容を掲載し、より多くの方々に読んでもらえるよう試みた。文章の整理の過程で編集者の私見・推測が多々加わったこともお許しを願いたい。

琉心会　介護老人保健施設「あけみおの里」
施設長　石　川　清　司